3-2 歴史的調査

3-2-1　歴史的環境

緑泥石片岩の利用

緑泥石片岩は、古くは縄文時代の敷石住居の敷石や石器として用いられた。また、小川盆地に 7 世紀後半に築造された穴八幡古墳の横穴式石室は、大型の緑泥石片岩等をパネル状に組み合わせたもので、古墳石材としても利用されている。奈良・平安時代の竪穴式住居のカマドにも、芯材、補強材、支脚などとして緑泥石片岩が用いられる例が埼玉県内各地に見られる。

その後、中世の武蔵型板碑の石材として関東各地に非常に大量に供給された。その要因としては、比較的軟らかく板状に剥がれやすくて均質なため採掘や成形、加工、運搬がしやすいこと、青緑色の色調あるいは白い点紋との組合わせという視覚的、心性的要素が考えられる。

板碑の造立

平安時代後期は末法思想、持経者の活動や経塚造営が盛んになり、13 世紀にかけて浄土庭園を備えた寺院の建立や造仏活動が行われた。下里に近い嵐山町平沢寺では平茲縄（秩父重綱か）の名を刻む久安 4 年(1148)銘の鋳銅経筒が出土し、12 世紀後半の一間四面堂（阿弥陀堂か）が検出されている。造営には武士が関わったことが推定され、平沢寺の例は秩父一族の当地域への進出を考える上で重要である。12 世紀代の遺物は畠山重忠の菅谷館跡に隣接する嵐山町山王遺跡、都幾川沿いのときがわ町古凍新田（ふるいしんでん）遺跡や慈光寺で出土している。12 世紀後半はいわゆる鎌倉街道上道に近接する嵐山町行司免遺跡があり、久寿 2 年(1155)の大蔵合戦の舞台である大蔵館もこの近くにある。

こうした流れの中で造塔活動も行われ、全国的に五輪塔などの石塔が造立されるようになり、関東地方では薄く剥がれやすい性質をもつ結晶片岩を用いた板碑が多く造立された。特に好まれて用いられたのが小川町や長瀞町で産出する「青石」＝緑泥石片岩で、「武蔵型板碑」と呼ばれている。関東地方で約 5 万基が確認されており、発掘調査資料の増加などにより今や約 6 万基に上るとみられており、このうち埼玉県が約 2 万 7 千基を占めている。現存最古の板碑は、熊谷市にある嘉禄 3 年(1227) 銘のもので、13 世紀前半の板碑は熊谷市のほか東松山市、鴻巣市、北本市、飯能市周辺などに見られる。

小川町最古のものは、竹沢地区の木呂子太子堂の建長(1249～56)銘のもので（10 ページ写真 2)、勝呂月燈院跡、下里東堀にも同形態の板碑が見られる。

造立推移を見ると、埼玉県では 1360 年代、小川町では 1340 年代がピークで(11 ページ表 1)、南北朝期が隆盛期である。その後一時減少し、埼玉県で 1480 年代、小川町で 1490 年代の戦国時代前期に微増した後、小川町では残念ながら所在不明の文禄 4 年(1595)銘庚申待供養板碑が最後で、現存するものでは天正 8 年(1580)の日蓮宗系板碑を最後に、埼玉県では戸田市妙顕寺の慶長 3 年(1598)の日蓮宗系板碑を最後に消滅する。

中世の支配関係

文永 6 年(1269)、僧仙覚が『万葉集註釈』を著したが、その奥書に「武蔵国比企郡北方麻師宇郷政所において之を註しおわんぬ」（巻 10）とあり、麻師宇郷は小川町増尾付近に比定されている。下里・青山の地名は貞和 5 年(1349)に「比企郡下里郷大聖菴」（宝篋印塔）、永徳元年(1381)頃に「比企郡慈光寺之内青山」（群馬県泉龍寺所蔵大般若経巻 150 奥書）とあるのが初出である。

小川町周辺には荘園は見られず国衙領（公領）に属していたと考えられる。鎌倉時代の武蔵国は将軍家知行国で国衙領は関東御領化しており、小川町域は事実上北条氏の所領になっていたと思われる。また、小川町周辺の大蔵・奈良梨などいわゆる鎌倉街道上道の渡河点や辻に形成された宿、坂東札所の成立などによる往来に伴い交通が発達したと考えられる。

大聖寺の康永 3 年(1344)銘六面幢に「開山希融」「源貞義」とあり、同年の十三回忌供養板碑によると「北陸使君」らの供養がなされている。これが北陸使君の十三回忌に建てられたとすると、元弘の乱に関係した北陸道の守護級の者、北条一門に関係する可能性があるが、特定できない。銘文にあるほかの人物を特定する資料もないが、この六面幢・板碑は南北朝初期の状況を考える上で重要である。この直後、足利尊氏・直義の対立による観応の擾乱が起き、所領が再び流動化する。正平 7 年(1352)の武蔵野合戦で直義派と南朝残党が衰退し、鎌倉府体制の確立へと向かった。

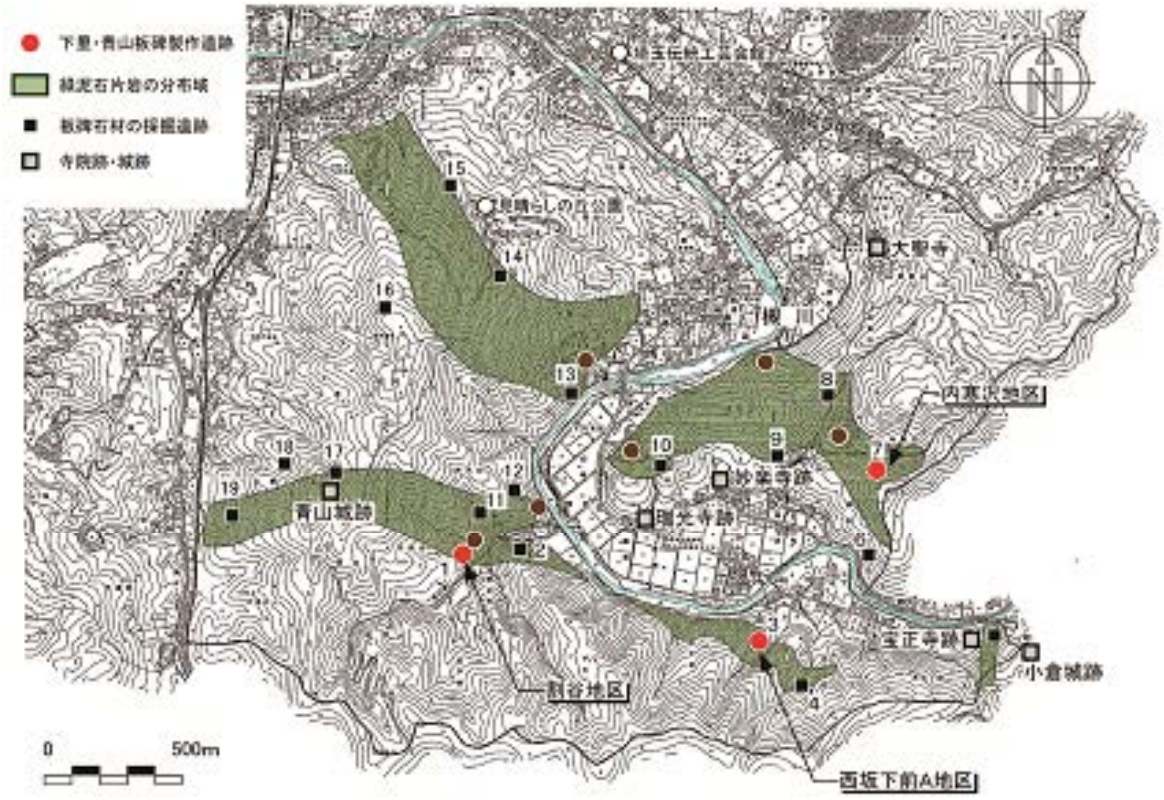
小川町域を本貫地とする武士として有名なのが竹沢氏である。系図によると児玉党の竹沢二郎行高に始まり、小川町最古の板碑が竹沢地区の木呂子や勝呂に現存していることから、こうした中小武士団が初発期板碑の造立に関わっていたことも推察される。

竹沢氏が歴史の表舞台に現れるのは南北朝期である。南朝方として活動し武蔵野合戦でも新田軍に属していたと考えられるが、竹沢右京亮は合戦直後に足利尊氏に従った。そして『太平記』によると、竹沢右京亮は延文 3 年(1358)に鎌倉府執事畠山国清に誘われて、再起を目指していた新田義興を多摩川の矢口の渡しで謀殺した。

応安元年(1368)、竹沢氏は平一揆の乱に加担して敗れたと推測され、竹沢郷が没収され藤田氏に与えられている。この乱を経て鎌倉公方の奉公衆や関東管領上杉氏被官の影響が強まったと推測される。この後、鎌倉公方と関東管領の対立という構図で政争が続く。寛正 2 年(1461)に扇谷上杉氏の重臣太田氏が越生に入り、この頃同じく上田氏が小河（小川）に在郷し大河原（東秩父村）を拠点としたと考えられる。さらに、山内・扇谷両上杉氏の抗争や長尾景春の乱で多くの山城が築造され、長享の乱では菅谷・平沢寺・横田・高見などに陣が築かれ大規模な合戦が繰り広げられている。続く後北条氏の進出で天文 16 年(1547)には松山城がその支配下となり、永禄 6 年(1563)頃に上田氏が城主としての地位を固めた。その過程で小川周辺も松山領としてその支配下となっている。

中世の在地支配を具体的に示す史料はないが、青山地内には「味正作」（御正作）や「前田」、下里地内には「割谷」「石場沢」「荒戸場」（粗仕上げの場か）などの地名が残り、板碑製作遺跡の確認とともに、中世の領主経営や生産、景観を探る手がかりになる可能性がある。

■図 23　周辺の主な遺跡等



城館跡

菅谷館と鉢形城の間にあって、いわゆる鎌倉街道上道に沿う市野川沿いに杉山城・越畑城・四ツ山城（高見城）があり、小川盆地の中城を取り巻く周囲の山々には青山城・腰越城・古寺砦・高谷砦、下里の南東端に小倉城がある。発掘調査結果などから、これらの城の主要年代は 15 世紀後半～16 世紀前半と考えられる。

下里・青山地区には青山城と小倉城が存在している。青山城の発掘調査例はないが、緑泥石片岩の岩盤を削って堀が切られており、石積みも確認されている。寛文 8 年(1668)の下里村検地帳によると、青山城周辺の地名に石場沢・割谷・石山・城山境目、同じく青山村検地帳に石山下里境などがあり、近世前期にも石材と城に関する山であると認識されていたと思われる。小倉城は槻川によって浸食された舌状の丘陵上に築かれた山城で、結晶片岩の石積みが多用さ

ている。近くには緑泥石片岩の分布も見られ、押し削り痕のある破片も検出されている。眼下の山根遺跡ではピット群や古銭埋蔵土坑が検出され、永楽銭など大量の銭貨、天目茶碗・丹波焼の壺などが出土し、年代は 15 世紀後半と 16 世紀後半に大別される。

宗教的環境と板碑

この地域周辺の宗教的環境を考える上で、天台宗慈光寺の存在は大きい。中世には惣寺として顕・密・禅・行徒を組織していたと考えられ、天台別院、延暦寺根本法華堂末寺として大きな勢力を有していた。仁王門跡に大型板碑が立ち並ぶ景観も有名であるが、山中には多数の板碑が伝来・出土しており、その生産・消費に何らかの関与があった可能性がある。史料に「慈光寺之内青山」とあり、青山地区には慈光寺の勢力が及んでいた可能性が高い。また、下里地区の大聖寺も現在天台宗で、六面幢の旧地とされる境内の斜面から多くの板碑とともに蔵骨器として使用されたと思われる 13 世紀後半の常滑壺が出土している。小川盆地や周囲の山々を見渡せる景勝地にあり、鎌倉時代末～南北朝時代には墓域や供養の場、聖地として位置づけられていたと考えられる。康永 3 年(1344)の阿弥陀一尊種子六角塔婆（六面幢。石造法華経供養塔。10 ページ写真 4）及び胎蔵界大日種子板碑（ともに重要文化財）などの板碑の優品が伝来しており、採石地に至近の寺院として板碑生産にも何らかの関与があったと考えられる。

■図 24　位置図

下里地区には 14 世紀前半の別時念仏衆が造立した板碑が複数見られ、念仏集団が組織されていたことが分かる。また、大聖寺に見られる六面幢やそれに類する可能性がある頭部水平板碑は小川町やときがわ町を中心とした地域にまとまって分布するほか、双式板碑も小川町に集中してみられる形態であり、地域の特性を見ることができる。

なお、至徳 4 年(1387)の京都天龍寺領土貢注文案に下里郷があり、応永 27 年(1420)の鹿王院文書から武蔵国にあったことが分かる。下里郷は東京都東久留米市にも存在していたが、これが小川町の下里であると仮定すると、禅宗天龍寺と深く関わる足利氏との関係も想定される。

一方、足利氏の庇護で真言宗三宝院流の布教が進み、応永 5 年(1398)頃に越生法恩寺が天台から改宗し真言宗の中心的寺院として再興され、戦国期にかけて勢力を広げた。また、越生に入部した太田氏により文明 4 年(1472)に曹洞宗として龍穏寺が中興され、大河原には松山城主

となる上田氏が入り菩提寺である日蓮宗浄蓮寺が影響力を強めた。近世の本末制度では法恩寺、龍穏寺の末寺が多く見られるが、こうした戦国期の勢力関係によるところが大きいと考えられる。さらに、下里周辺は上田氏家臣による日蓮宗の浸透があったと考えられ、天正 8 年(1580)銘題目板碑は、上田氏と考えられる「主君蓮忠」や父母の追善のために法華経一千部の真読供養を行った際に造立された。近世前期以降も、下里地区の田中氏、金子氏などは浄蓮寺と寺檀関係が続いている。

下里・青山地内の寺院

下里地区には、大聖寺をはじめその末寺の妙楽寺・瑞光寺（随光寺)、宝正寺（宝勝寺・宝性寺)、宝寿院など、比較的多くの寺院が存在していた。中世の様相は不明であるが、江戸時代には大聖寺は塚田村（寄居町）の天台宗普光寺末、宝正寺は青鳥村（東松山市）の天台宗浄光寺末、宝寿院は今市村（越生町）の真言宗法恩寺末であった。

このうち大聖寺は山号を「石青山」といい、青石（緑泥石片岩）に由来していると考えられる。寛文検地帳によると妙楽寺は不動免・観音免、瑞光寺は地蔵免、宝正寺は愛宕免、宝寿院は明神免を持っていた。瑞光寺跡には妙楽寺の旧本尊である慶長 4 年(1599)銘の木造千手観音坐像と同じ頃の作の瑞光寺本尊と考えられる木造地蔵菩薩坐像が伝来する。また、大聖寺観音堂に伝来する宋元風の観音・勢至菩薩像は鎌倉時代末～南北朝時代、ローカルな阿弥陀如来立像は南北朝期は下らない頃の作と考えられ、大聖寺持ちの阿弥陀堂の本尊であった可能性がある。宝寿院は八宮明神の旧別当寺である。このほか、寛文検地の地名として善正寺谷があり、下里上郷に善正寺（善昌寺）という寺があったと伝わっている。

青山地区には寛文検地の頃には円城寺、延命寺、円光寺、常覚院（浄学院)、大蔵院、慈眼寺、永源寺があった。このうち、円城寺は越生の曹洞宗龍穏寺末、円光寺と永源寺は平村（ときがわ町）慈光寺寺中臨済宗霊山院末、慈眼寺は今市村（寄居町）曹洞宗泉龍寺末、常覚院は黒山村（越生町）から西戸村（毛呂山町）に移った山本坊配下の本山派修験で氷川明神や八王子社を支配していた。寛文検地帳の地名に「らんとう場」や「ほうせん坊」がある。山号は常覚院が青岩山、慈眼寺が青龍山、円城寺が北青山で、やはり青石由来の可能性がある。

信憑性に疑問があるが縁起等による開山年代を見ると、円城寺は治承 4 年(1180)の宇治川の戦いで敗れた青木氏房の子が開き、その後正中 2 年(1325)没の青木重成が開基したというが、『新編武蔵風土記稿』(以下『風土記稿』) では延文 5 年(1360)没の日栖周公を開山としている。円光寺の創建は建長 2 年(1250)とするが、『風土記稿』は弘安元年(1278)没の古伝崇井の開山といい、慈眼寺は慶長 18 年(1613)、永源寺は天平 19 年(747)に行基が開山し弘安 7 年(1384)に再建したとするが、『風土記稿』は元亀 2 年(1571)没の春応を開山としている。

3-2-2　遺跡調査の成果概要

①　確認調査概要

割谷地区（図 27-1 及び 2）

露頭、ズリ斜面、ズリ山、ズリ平場で構成される。西側の露頭には、時期不明のヤ穴が残っている（写真 7)。北側の窪地は昭和 30 年代の大規模な採石により形成されたもので旧状は失われており、もとは現存するズリ平場やズリ斜面が連続していた。この新しく形成された崖部で露頭とズリ平場の堆積状況が観察でき、ここから崩落したと考えられる板碑未成品が採集されている。また、この露頭の片理面の走向・傾斜を根拠にして、トレンチ調査における露頭の認定を行うことができた。

遺跡最奥部の斜面部に残る浅い谷状地形の中央部分に、谷に沿って 2 本のトレンチを設定した。このうち第 1 号トレンチ（写真 5）からは黒褐色の岩盤（奥側。上段)、青緑色の畳一畳大の板石（中段。写真 6)、褐色に風化した岩盤（下段。露頭）の 3 段の階段状となる石材採掘の遺構面が検出された。中段の板石は長さ 180 ㎝、幅 80 ㎝以上、厚さ 18～22 ㎝で青緑色を呈し、横断面（節理面）には上面から厚さ 12 ㎝のところに幅 4 ㎝、高さ 4 ㎝のカマボコ状のヤ穴痕が 1 か所確認された。さらに、上面から厚さ 6 ㎝程のところに幅 1.5 ㎝、高さ 0.5 ㎝の長方形を基本とする浅い工具痕が片理面に平行して 6 か所、縦断面にも上面から厚さ 6 ㎝ほどのところに同様な工具痕が 2 か所確認された。これらはともに水平分割（横割り）を目的とした工具痕と考えられる。ここでは、ヤ穴技法を用いた板材の採石が行われた可能性がある。

第 2 トレンチからは、斜面下位側の表土直下で石材の打剥の際に生じた工具痕や敲打（こうだ）痕を残す石材を多く含む屑石の集中区が検出され、山状の高まりをもって堆積している様子が確認された。これに隣接して板碑未成品（写真 8）が出土するとともに、やや離れたところからも製作途中の板碑未成品や台石未成品が出土した。石材採掘場所に比較的近いこの場所で未成品への分割、成形が行われていた可能性がある。

こうしたことから、現況に残る谷状の微地形や窪地、ズリ（不用石材）の堆積（ズリ山）は当時の採掘の単位を示唆する可能性があることが分かった。そして本遺跡は、第 1 号トレンチで検出された採掘遺構に見られる石材の採掘遺跡であるばかりではなく、第 2 トレンチで検出された板碑未成品の製作遺構に見られるように板碑の生産遺跡であることが判明した。

写真 5　1 号トレンチ

写真 6　一畳大の板石検出状況

写真 7　ヤ穴痕跡が残る岩塊

写真 8　板碑未成品の検出状況

図 25　板碑未成品

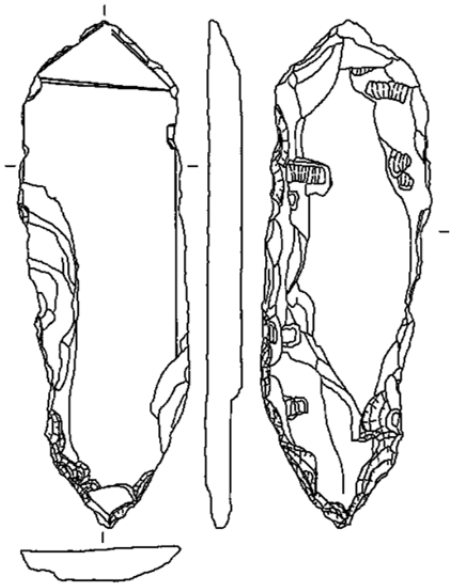


図25は、全長46.1cm、最大幅15.0cm、厚さ3.1cmの板碑未成品で、全長を残す数少ない例であるが、左側縁部を一部欠損する。正背面ともに褐色を帯びる片理の自然面を利用している。正面の左右両側縁部と頭部山形の斜辺部、底辺部にケガキ線が認められ、斜辺部と底辺部には引き直しにより２本ずつのケガキ線が認められる。ケガキ線の頂角は99°を測る。側縁部はケガキ線に沿って正面側から敲打により成形されている。背面には、褐色の片理面を剥ごうとしたのか面に沿って底幅18㎜の深い押し削り痕が認められる。

図 26　台石未成品

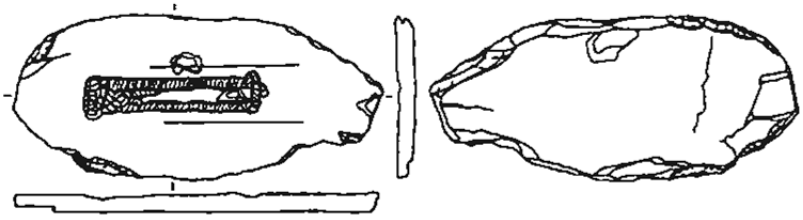


図 26 は、最大 40.1cm、奥行 17.2cm、厚さ 2.0cm の台石未成品である。ほぼ中央部に幅 19.0cm、奥行 3.9cm（両端部は 4.4cm と 4.6cm）のほぞ穴を彫り始めている。ほぞ穴の長軸に平行して上下に長さ 16.3cm と 15.0cm のケガキ線が認められる。ほぞ穴の彫り方はヒダ状の平ノミの痕跡から板碑未成品の外形成形に見られた「形彫り溝」と同様に、石材の面に対して平ノミの刃先を斜めに当ててセットウ（金槌）で叩いて四辺を彫り、中央部の残った部分を押し削りと同じ技法で削り取る方法が想定される。

西坂下前Ａ地区（図 28-1 及び 2）

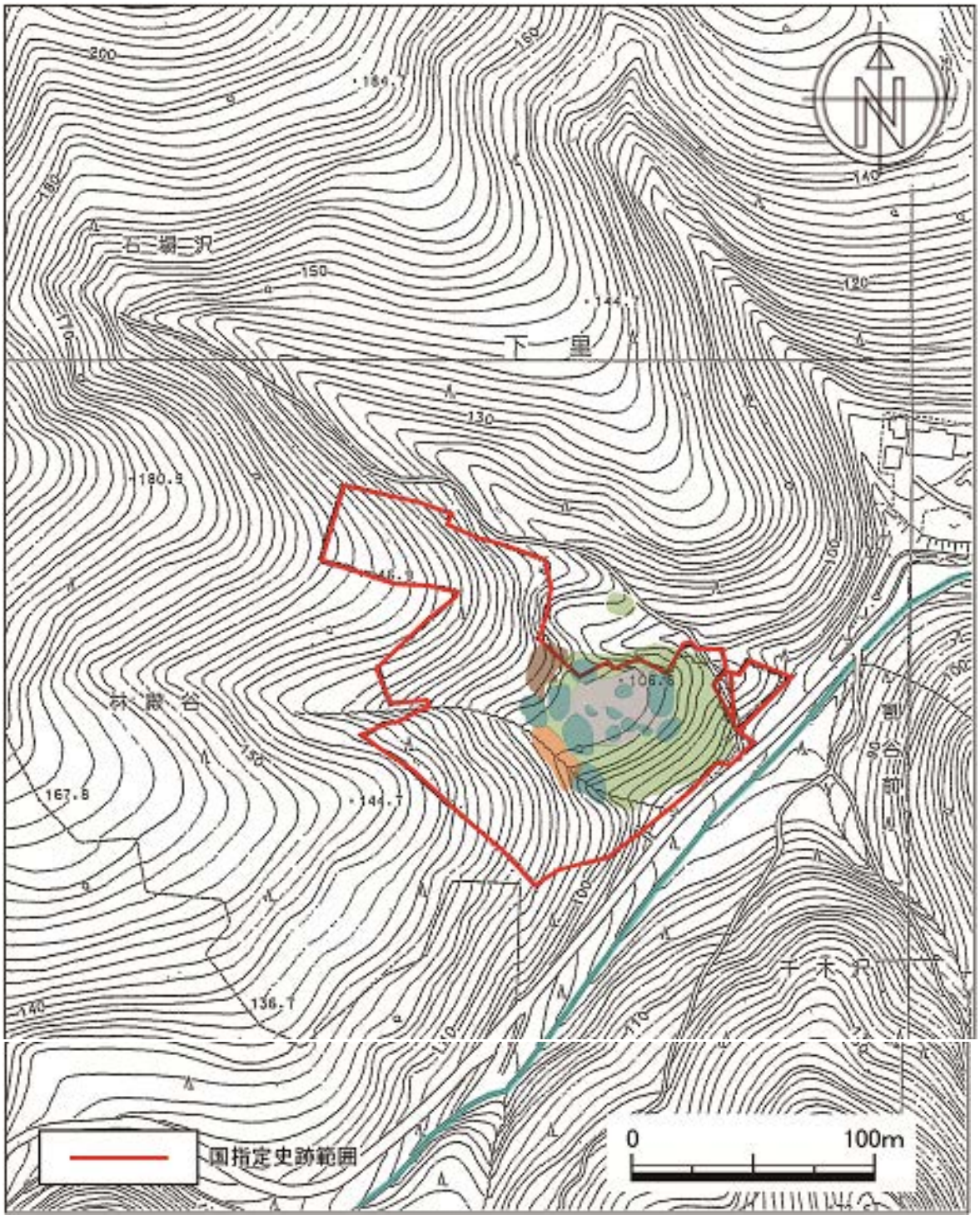
下里字西坂下前に所在し、槻川の右岸の槻川と小枝谷に挟まれた低山の尾根部から南東側斜面にかけて立地する。割谷地区と同様に以前から板碑石材の採掘地の伝承があった。遺跡の規模は約 160ｍ×100ｍを測る。遺跡西側最奥部に緑泥石片岩と石墨片岩の大規模な露頭が所在し、採掘に伴う谷、ズリ平場、採掘坑の名残りと推測される窪地 2 か所、数多くの瘤状のズリ山、広範なズリ斜面が広がる。採掘坑の単位と考えられる谷の規模も大きく、ズリの堆積も厚く、長期の採掘が想定される。板碑未成品 3 点が採集された。

内寒沢地区（図 29-1 及び 2）

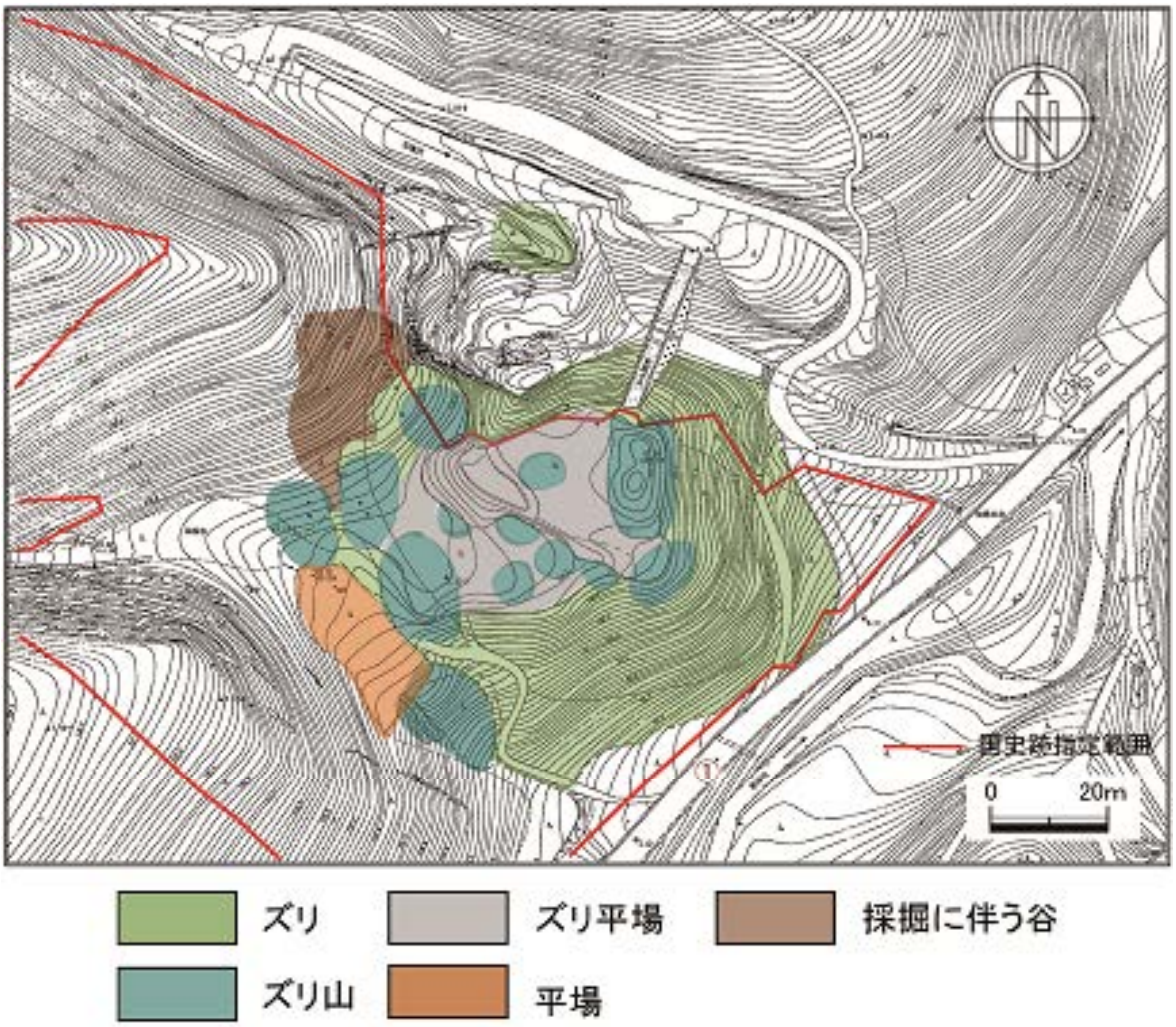
下里字内寒沢に所在し、槻川左岸の東西に延びる低山の北側斜面の上位から裾部に立地する。土地所有者はここを「石山」と呼ぶ。内寒沢の谷を挟んだ北西側では昭和 30 年代からの重機を使った大規模な採掘が行われていた。遺跡の規模は約 120ｍ×120ｍの規模を測り、遺跡最上部に最大幅約 47ｍの浅い大きな谷があり、その東側から南側の縁辺部に幅約 15ｍ、高さ 3.6ｍ等の緑泥石片岩の露頭がある。この谷の下部に幅約 47ｍ、奥行き 18ｍほどのズリ平場が所在し、北側縁辺部に径 20ｍほどのズリ山が残る。平場下位の急斜面には大量のズリが広範囲に見られ、ズリ斜面中腹には斜面の崩落を防ぐためと考えられる後世の石積みが等高線に沿うように見られる。採掘坑の単位と考えられる谷の規模も大きく、ズリの堆積も厚く、長期の採掘が想定される。板碑未成品３点、加工石材 2 点が採集された。

割谷地区について

■図 27-1　遺跡概略図

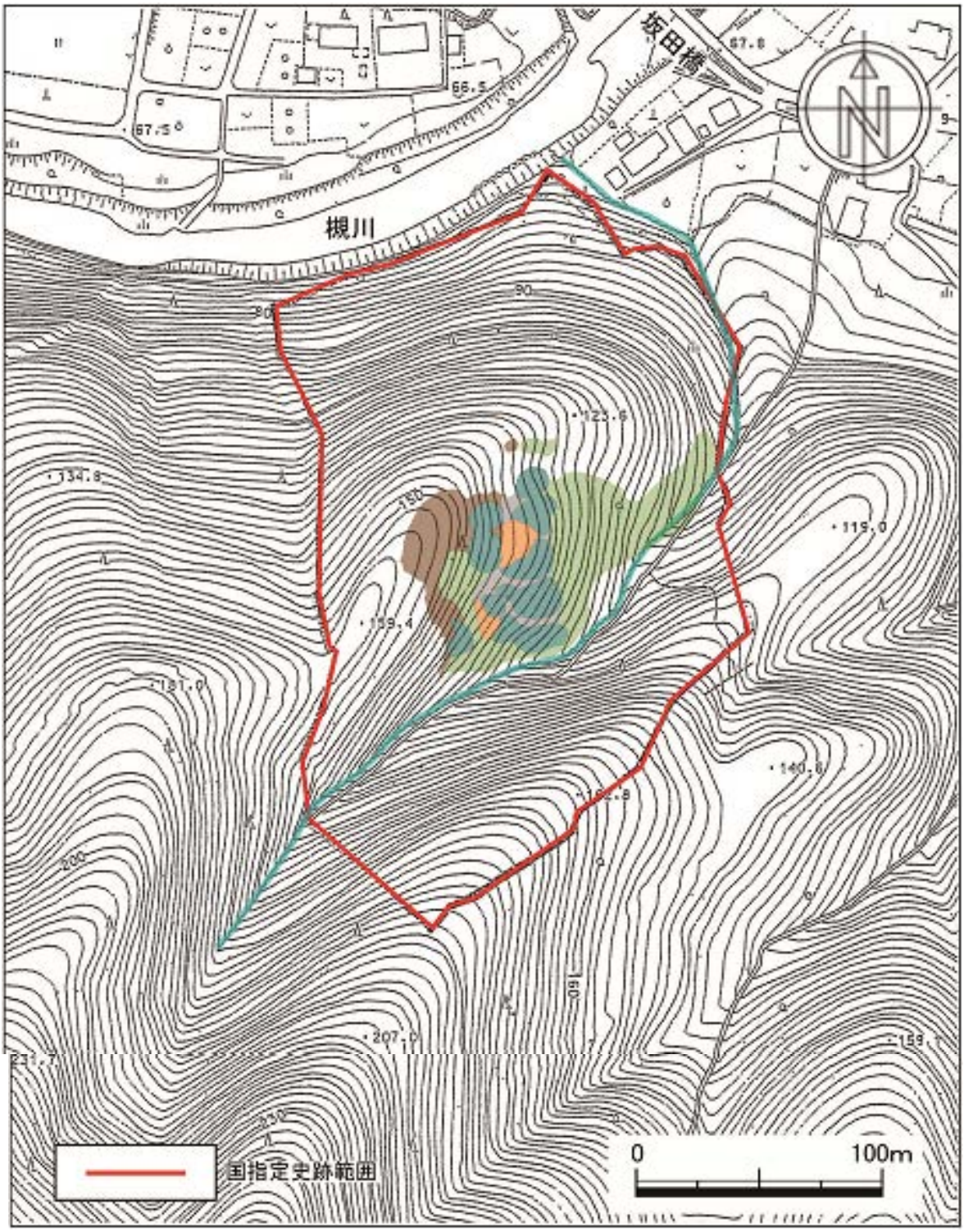


■図 27-2　遺跡主要部の遺構区分

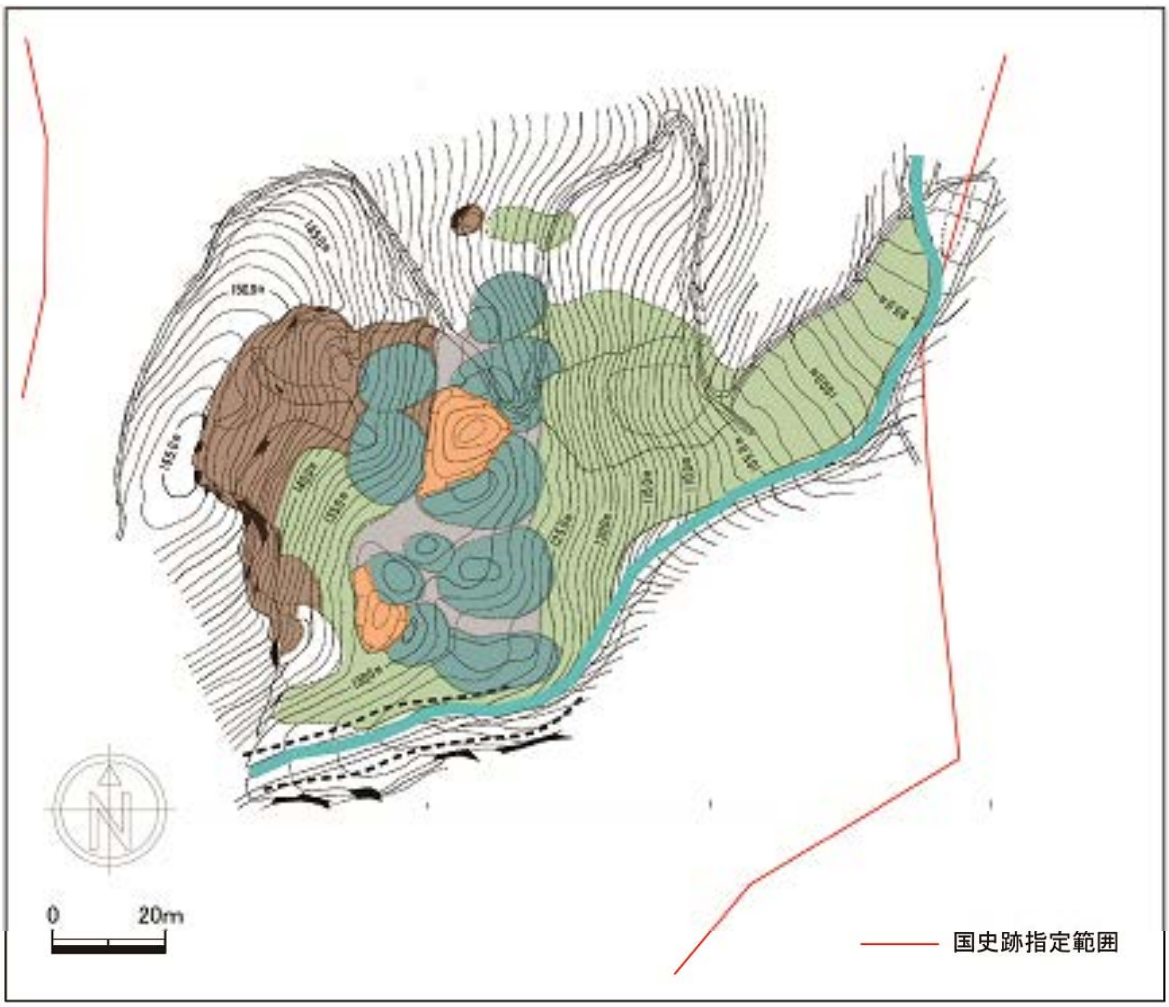


西坂下前Ａ地区について

■図 28-1　遺跡概要図



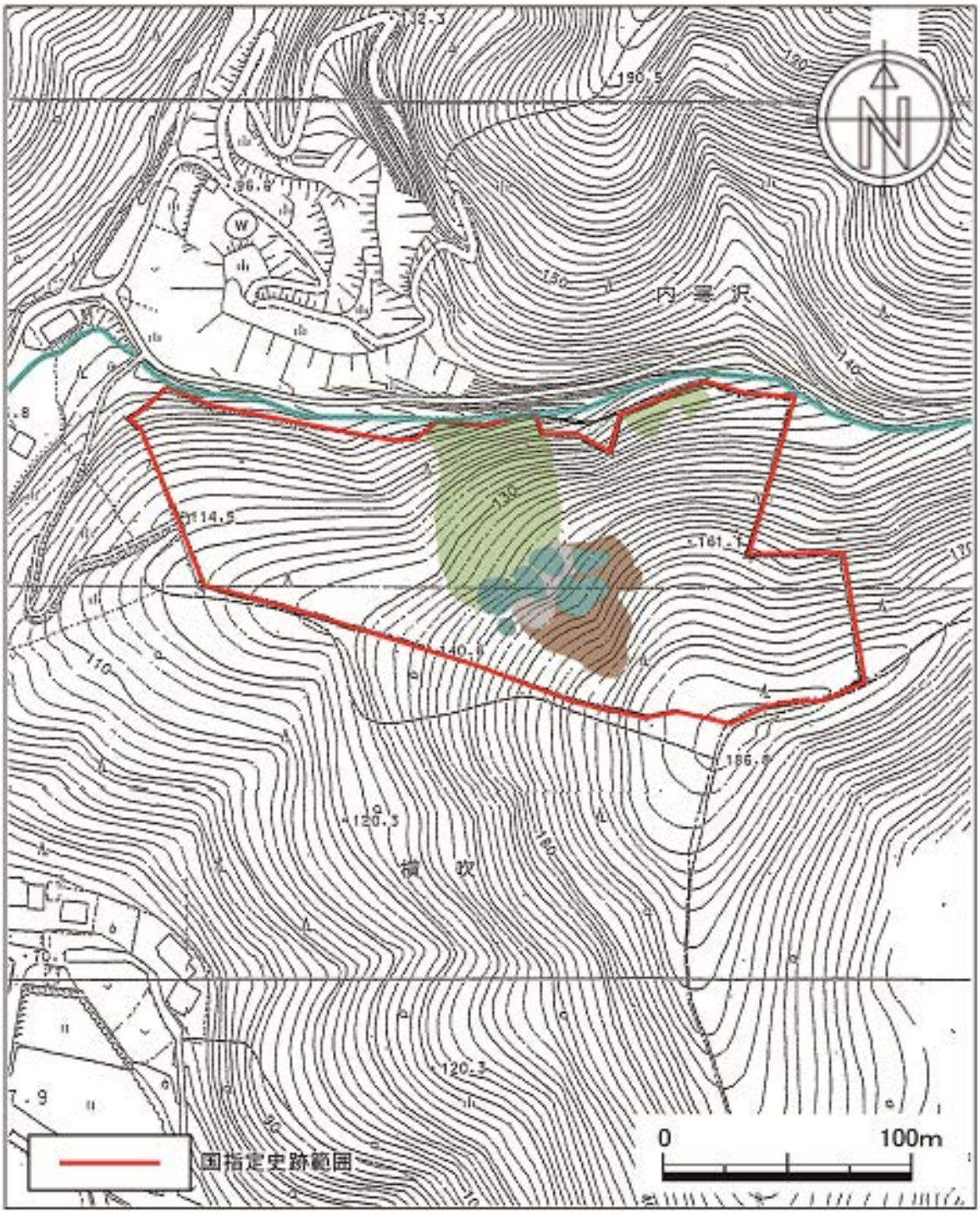
■図 28-2　遺跡主要部の遺構区分



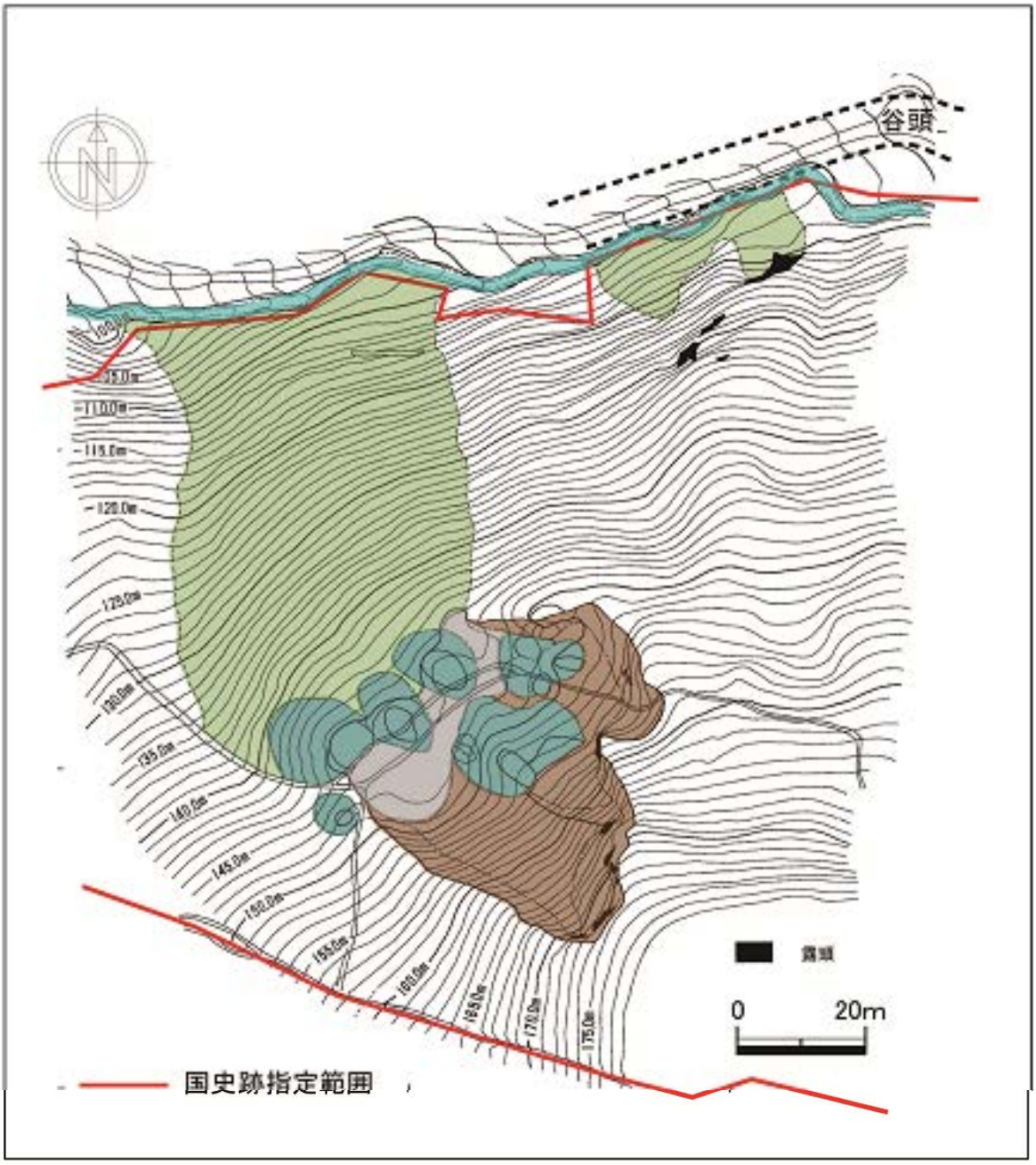
ズリ　ズリ平場　採掘に伴う谷
ズリ山　平場

内寒沢地区について

■図 29-1　遺跡概略図



■図 29-2　遺跡主要部の遺構区分



ズリ　　ズリ平場　　採掘に伴う谷

ズリ山　　平場

②出土・採集遺物

遺物には板碑未成品、台石未成品、工具痕を残す加工石材がある。適当な厚さの板状にした面を粗調整するために平ノミを平らに当てセットウ（金槌）で叩きながら連続的に削っていく「押し削り痕」、平ノミを斜めに当て同様に叩き、割断のための細い溝状の分割線を入れる「分割溝」や板碑形の作り出しを意図した「形彫り溝」、板碑の外形や山形部の割付線をキリ状の細い工具で直線を引いた「ケガキ線」、横割りのために側面から工具で叩いた「敲打痕」があるものが見られる。一方、研磨や彫刻、装飾が施された未成品や完成品は全く見られなかった。

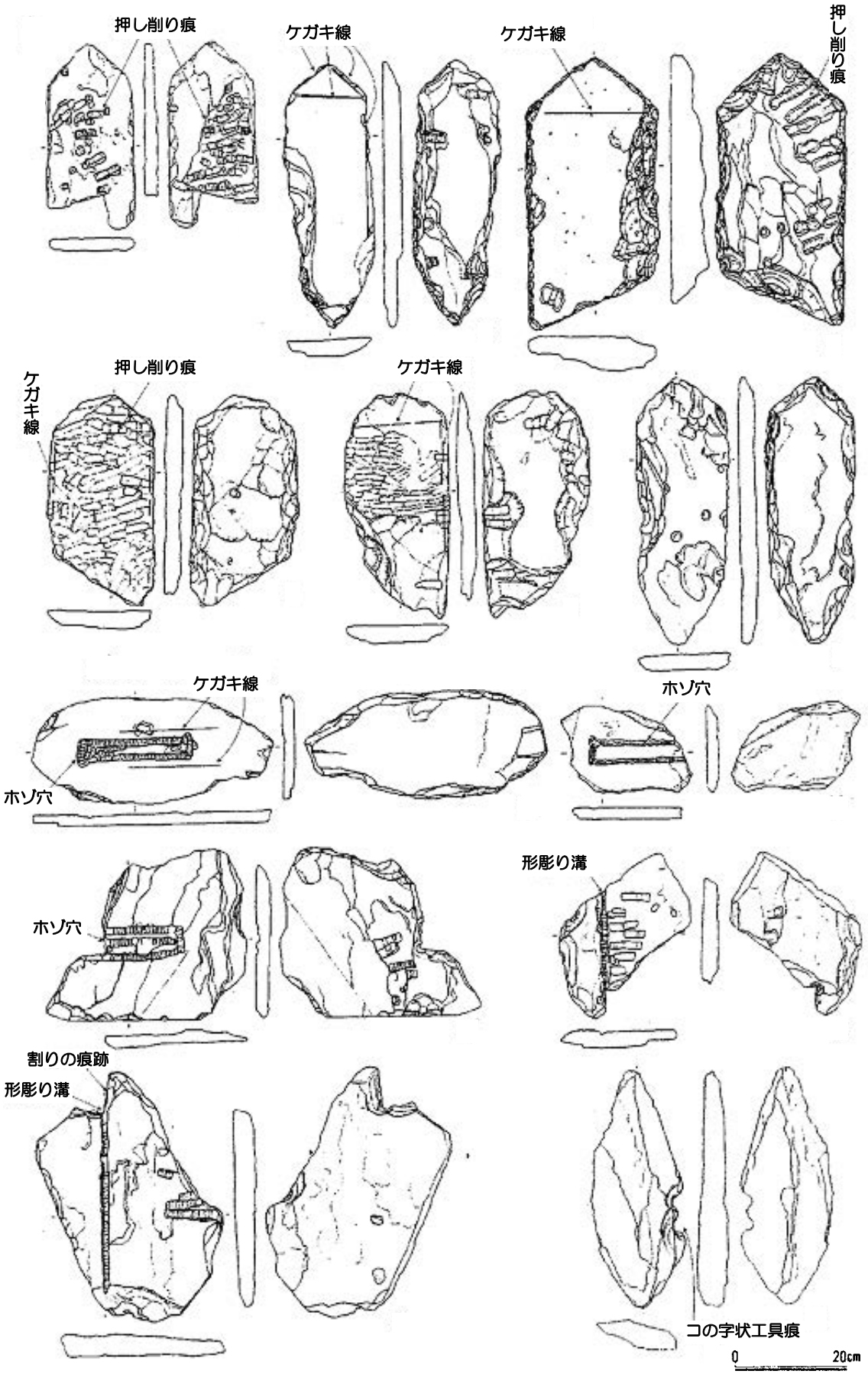
こうしたことから、この遺跡では採掘－成形－表裏・側面の粗調整までを行い、これを第一次製品として出荷し、その後の仕上げ調整－彫刻－装飾はほかの製作遺跡（二次加工場）で行っていたことが想定される。

遺跡の時期の決め手となる陶磁器類が全く出土しなかったことから、未成品の規模からの推定が試みられた。横幅が確認できる板碑未成品は 42 基で、12.0 ㎝～22.5 ㎝に収まる小型なものが多く、主体は 14 ㎝台～17 ㎝台、ピークは 15 ㎝台にある。この規格を、供給地の可能性が高い都幾川、入間川下流域の完成された板碑と比較して年代を推定した結果、武蔵型板碑造立の最盛期である 14 世紀半ばから第二の盛期である 15 世紀後半と考えられ、この遺跡の操業期間もその時期にあると想定される。

■表 11　板碑の製作工程

遺跡	下里・青山板碑製作遺跡				他の製作遺跡	他の製作遺跡	他の製作遺跡
製作工程	採掘	分割	成形	調整（整形）1	調整（整形）2	彫刻	装飾
作業	・露頭、岩盤からの採掘	・水平、平面分割	・板碑形に成形	・表裏、側面の粗仕上げ	・表裏、側面の仕上げ(研磨)	・二条線、額部の彫刻 ・種子、蓮座、銘文等の彫刻	・最終研磨 ・金箔押、彩色
痕跡	・谷状の採掘坑 ・階段状の岩盤 ・露頭のヤ穴痕	・平面コ字状等の工具痕 ・断面擂鉢状の工具痕	・外形指示のケガキ線 ・側面敲打痕 ・形彫り溝	・押し削り痕	・研磨痕	・割付線 ・彫刻部のノミ痕、研磨痕	・研磨痕

■図 30　加工痕のある板碑未成品・台石未成品等



3-2-3　板碑石材採掘遺跡の分布

緑泥石片岩の露頭やズリ、板碑未成品、加工石材（押し削り痕を残す石材）の存在を指標として、緑泥石片岩の分布域である下里・青山地域において板碑石材採掘遺跡の分布調査を行ったところ、合計 19 か所の採掘遺跡が確認された。

下里地域では、昭和 30 年代以降に重機を使った大規模な石材採掘が 6 か所で行われ、主に建築資材として利用され、現在もそのうちの 1 か所では、採掘は行われていないが石材の出荷は行われている。重機を使った現代の採掘場は、露頭や古いズリの状況を確認して採掘場所を選定したということから、中世の採掘遺跡と重なっている可能性が高く、採掘遺跡の数は更に多かったと推測される。こうしたことから、下里・青山地域は遺跡数やその規模から板碑石材の一大産出地と呼ぶにふさわしいとともに、こうした遺跡群は武蔵型板碑造立を中心的に支えた可能性が高いと考えられる。

■表 12　板碑石材採掘遺跡分布調査結果一覧　（1・3・7 が国指定史跡）

No.	遺跡名	所在地	採取遺物	規模（m）	露頭規模（m）	ズリ平場規模
1	**割谷採掘遺跡**	**下里字石場沢他**	**板未 50 余、台未 6**	**140×110**	**W8×H2 等**	**50×45m**
2	割谷前採掘遺跡	下里字割谷前	板未 1、加工 5	100×65		
3	**西坂下前Ａ採掘遺跡**	**下里字西坂下前**	**板未 3**	**160×100**	**W10×H5 等**	**30×50m**
4	西坂下前Ｂ採掘遺跡	下里字西坂下前	台未 1、加工 4	55×30	W8.5×H3 等	—
5	東坂下前採掘遺跡	下里字東坂下前	加工 2	125×70	W10×H1.5 等	—
6	横吹採掘遺跡	下里字横吹	板未 2、加工 1	140×70		—
7	**内寒沢採掘遺跡**	**下里字内寒沢**	**板未 3、加工 2**	**120×120**	**W15×H3.6 等**	**47×18m**
8	愛宕山Ａ採掘遺跡	下里字愛宕山	板未 2、加工 3	110×60	W15×H6	—
9	愛宕山Ｂ採掘遺遺跡	下里字愛宕山	板未 2、加工 1	70×55	W17×H3	9×4m
10	徳寿山採掘遺跡	下里字徳寿山	板未 2、加工 1	40×30	W13×H5	9.×6.3m等
11	栗木谷採掘遺跡	下里字栗木谷	板未 2、加工 1	50×35	W9.3×H4.5	—
12	堀切採掘遺跡	下里字堀切	板未 1	80×45		—
13	甲西山採掘遺跡	下里字甲西山	板未 1、加工 3	60×50		—
14	大沢入採掘遺跡	青山字大沢入	板未 1、加工 2	20×20	W14×H3.0	—
15	大沢谷採掘遺跡	青山字大沢谷	板未 6、加工 3	350×110	W27×H10 等	20m×8m等
16	浅間山採掘遺跡	青山字浅間山	加工 3	85×60	W13×H2.5	—
17	立巌Ａ採掘遺跡	青山字立巌	板未 1、加工 4	80×50		—
18	立巌Ｂ採掘遺跡	青山字立巌	加工 3	100×50		—
19	立巌Ｃ採掘遺跡	青山字立巌	板未 1、加工 2	80×30		—

（小川町埋蔵文化財調査報告書　第 33 集より転載）

■図 31　板碑石材採掘遺跡分布図

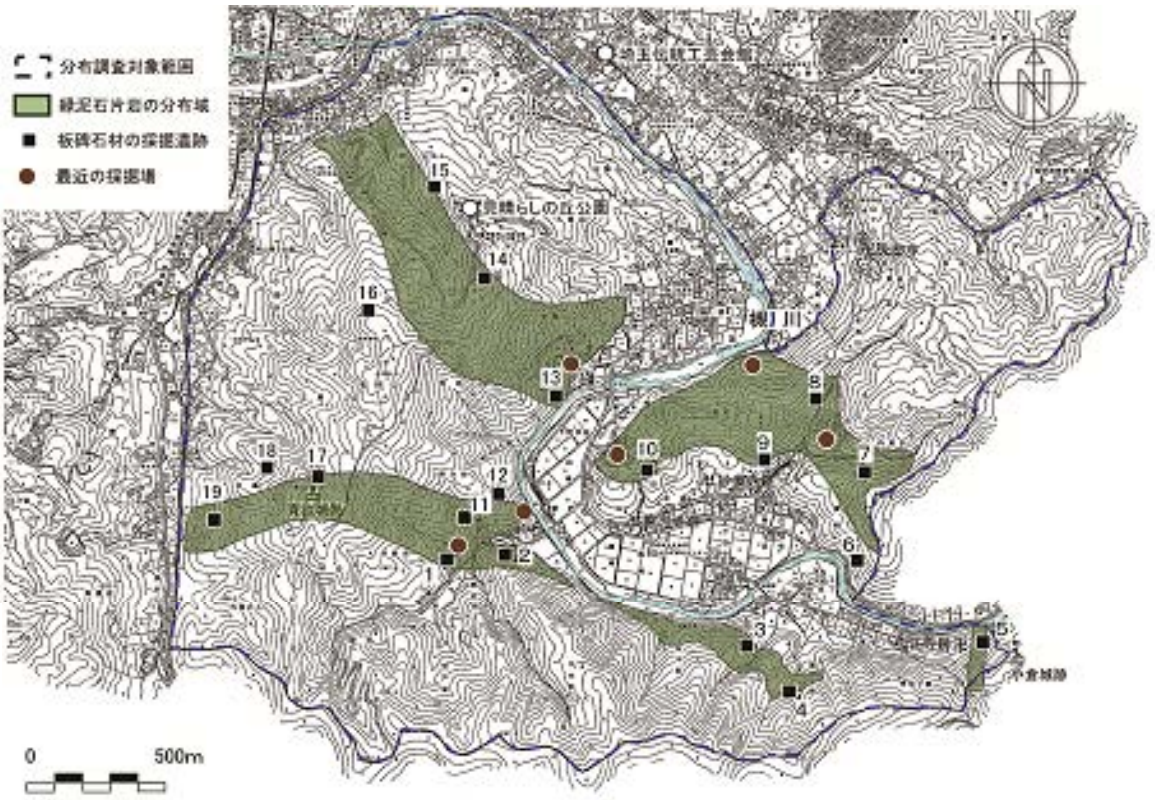


写真 9　大沢谷採掘遺跡(No. 15)の露頭

3-2-4　周辺に所在する緑泥石片岩を利用した構造物

山中にある遺跡の下、いわゆる「里」には、遺跡から産出するものと同様の石材を用いて、石碑、土留、基礎、水路、階段等が数多く構築されている。

板碑・石碑などに利用された緑泥石片岩（写真 10）

大聖寺　名称碑

馬頭尊

石灯籠

板碑と近世供養塔

板碑と近世の墓石

板碑と庚申塔

寺院・城跡などで利用された緑泥石片岩（写真 11）

大聖寺の境内地造成

小倉城跡　郭 1　北虎口付近

八宮神社　参道

八坂神社　参道

緑泥石片岩の墓石

緑泥石片岩の墓石

水路や石橋、擁壁などに利用された緑泥石片岩（写真 12）

水路護岸

石橋

河川護岸

石橋として利用されていた緑泥石片岩

土地造成の擁壁（水田など）

土地造成の擁壁

下里の風景（山・田・槻川・山裾の民家）（写真 13）